



書評

[評者]

和足 孝之

Michigan University, Division of Hospital
Medicine, VA Ann Arbor Healthcare System.

2週間で学ぶ臨床感染症

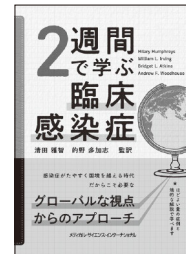
(原著タイトル: Oxford Case Histories in Infectious Disease and Microbiology, 3rd Edition)

清田 雅智・的野 多加志 監訳

●A5 頁392 2021年10月

定価: 4,400 円 (本体 4,000 円+税 10%)

[ISBN978-4-8157-3033-8] MEDSi 刊



何を隠そう僕は翻訳本が好きではない。なぜかと言うと、1つは受験英語の弊害で多くの翻訳本は直訳が多く、原著者は一体何を伝えたいのか、ロジックが逆に分かりづらくなることが多いからだ。また、色々な訳者が自由に翻訳してしまうことでさらに統一感がなくなる。

しかし、この本は全般的な文章のわかりやすさでは群を抜いており、まったく問題がなかった。おそらく引用文献と原文と訳者の日本語とのすり合わせという緻密な作業をまったく厭わなかったであろう清田雅智先生と的野多加志先生達のプライドが練り上げた成果であるのは間違いない。相当な苦勞があったとお見受けする。

もっと言うと、類書に多い、「どうだ！海外でしか遭遇しない貴重な症例だろう！？珍しいだろう！？」と言わんばかりの一部の感染症オタクのみが心躍る症例ばかりを集めては、珠玉の症例集などと謳っている本はもっと好きではない。臨床はすべからず、一生涯遭遇しないかもしれない疾患を学ぶよりも、常に遭遇しうる疾患を深く学ぶほうがより患者に貢献できる。prevalenceであり、pre-test probabilityの問題が重要なのだ。それでも時に、想定していなかった感染症疾患に遭遇することがある。その臨床現場のコモンとアンコモンのバランスこそが実に面白いのだ。

そして、この点も太鼓判が押せてしまう。この書籍に記載された全47症例は同じ島国の先進国であり、その疾患のセレクションは日本の全内科医、総合診療医にベストマッチしたバランスで用意されていた。お

そらく偶然ではあるだろうが、感染症専門医にとってはマストなもののばかりであり、すべて答えることができる必要があるレベルだろう。

もっと言うと、僕は「臨床の匂いがしない」感染症のテキストは本気で嫌いだ。しかし、この本は、自分をどこか俯瞰的に観察しながら、優れた臨床感染症指導医と一緒にベッドサイドで教えてもらっている匂いがプンプンしてきた。わが国で言えば、イメージ的には青木 眞先生や、矢野晴美先生などの国際的フィールドで活躍する感染症医の香りに近かった。貴重な感染症の症例は遭遇してからアウトカムが出るまで、自分の頭の中で咀嚼するのにどうしても週や月の単位で時間を要する。しかし、本書の一症例は約10~20分程度あれば重要なエッセンスのみを疑似経験をすることができる。こんなに効率的な学び方はほかにないだろう。

わが国には、感染症の医師であることを名乗りながら、臨床がわからない感染症の医師がもしかしたら歴史的に多かった（のかもしれない）。そして、僕ら若手（自分が若いかどうかはおいておいて）が本当に必要としてきたのは、実験基礎医学を背景にした縦割りの感染症ではなく、真に患者を診ている臨床感染症医へのテキストであった。時はながれ、ようやくこのようなテキスト達が世にできることを心から喜ぶたい。COVID-19に始まり、渡航医学や臨床感染症医学は極めて重要な位置を占めるに至った昨今、すべての臨床家に手にとっていただきたい臨床感染症の最良書である。